

私の好きな人でラグビー日本代表の前ヘッドコーチであるエディー・ジョーンズ氏は、日本のラグビーを強くするために「自分たちの強みを知り、それを伸ばすこと」が重要であると述べていました。私は昨年4月に農学部長を拝命しましたが、農学部の強みとは何かと考えたと、本日紹介しました「スマート・テロワール」「在来作物」「ピストロ下水道」はいずれもSDGsに深く関わるプロジェクトであり、研究シーズ集にある通りすでに農学部ではSDGsに関わる多くの研究が展開されており、これからは、SDGsといえば農学部と認知されるよう、学部一丸となつてSDGsを農学部の顔にできればと思っています。

それから農学部の売りとして、国際交流が盛んであることも挙げられます。現在はコロナ禍の影響で交流が滞っておりませんが、以前は毎年100名を超える留学生が農学部で学んでいました。今後も強みである国際交流を活発に行つて、留学生に帰国後、農学部で学んだSDGsを世界に発信してもらうことも大切だと考えています。

平 本日は皆さんにお配りした研究シーズ集は、農学部の最初の取り組みとしてSDGsに関連がありましたカーボンニュートラルの問題であると考えています。鶴岡市も「ゼロカーボンシティ宣言」をしましたが、その目標を達成するための道筋を作ることへの協力が大学の使命であると考えています。

平 SDGsに関する地域独自の目標を置くことは私も大変いいことだと思います。村山学部長、農学部としてはいかがでしょうか。

村山 鶴岡市は「SDGs未来都市」に選ばれていますので、農学部としてもその取り組みをempowerしたいと考えています。山形大学の3つの使命の1つに「地域創生」、5つの基本理念の1つに「地域に根ざして、世界をリードする大学を目指す」があります。地域のSDGs活動に対して、農学部が一丸となつてゴールに到達できるよう、引き続き尽力していきたいと思っています。

平 それでは時間が参りましたので、座談会を終了したいと思います。最後まで熱心に聴講いただきありがとうございます。

した研究を知つていただくきっかけになればと用意したものです。専門の研究をSDGsと関連付けて社会へわかりやすく説明することも大学として大切なことだと考えています。

村山 本日のシンポジウムでは食に関する研究事例を紹介しましたが、農学部の強みとして環境に関する研究もあります。例えば森林をフィールドにする研究で「カーボンニュートラル」への取り組みについて、強化していきたいと考えています。カーボンニュートラルに関しては山形大学全体として取り組む構想もありますので、林田副学長と連携しながら農学部らしい森林環境からみたカーボンニュートラルに関する研究などを、さらに加速させていきたいと考えています。

平 以前、私が10か月滞在したドイツの南西部にあるフライブルク市は、当時から環境首都と呼ばれ、様々な環境問題に取り組み町として有名でした。最近SDGs先進都市とも呼ばれています。学芸出版社刊の「SDGs先進都市フライブルク（中口毅博・熊崎実佳、2019）」によると、例えば農業では、農業・化学肥料を用いず自家

採種できる固定種を栽培し、得られた収穫物を分配することで、市場経済の影響を受けず食料の確保ができる。ガルトンコープなどの取り組みが紹介されています。

SDGsの大切な理念に「leave no one behind（誰一人取り残さない）」がありますが、フライブルクが高く評価されているのはSDGsが掲げる17ゴールのすべてについて官民が一体となつて取り組んでいることです。山形大学でも是非SDGsのすべての目標の達成を目指して欲しいと思います。林田副学長、いかがでしょうか。

林田 山形大学が取り組むSDGsでも地域のSDGs活動をempowerすることが重要であります。フライブルクの事例を紹介いただきましたが、私は山形の地域性を生かした、山形独自のSDGsのゴールを設定することも必要だと考えています。山形大学がすべきことは、持続可能な地域社会を構築するための山形独自のゴールへの道筋を「やまがたモデル」として提示することだと思っています。山形大学は総合大学ですので、様々な研究分野を結集して地域社会がゴールを目指すことをempowerしたいと思っています。そのなかで早急に取り組む課題の1つが、村山学部長からも

補足情報

※1 山形大学SDGs紹介リーフレット



<https://sdgs.yamagata-u.ac.jp/documents/pamphlet.pdf>



※2 山形大学農学部SDGsから見た研究シーズ集



<https://www.tr.yamagata-u.ac.jp/sdgs/sdgs.html>



※3 プラネタリー・バウンダリー (Planetary Boundary)

地球の環境容量を科学的に表示し、地球の環境容量を代表する9つのプラネタリーシステム（気候変動、海洋酸性化、成層圏オゾンの破壊、窒素とリンの循環、グローバルな淡水利用、土地利用変化、生物多様性の損失、大気エアロゾルの負荷、化学物質による汚染）を対象として取り上げ、そのバウンダリー（臨界点、ティッピング・ポイント）の具体的な評価を行ったもの。ストックホルム・レジリエンス・センター所長ロックストロームらにより開発された概念。現在人類が地球システムに与えている圧力は飽和状態に達しており、気候、水環境、生態系などが本来持つレジリエンス（回復力）の限界を超えると、不可逆的変化が起こりうる。人類が生存できる限界（プラネタリーバウンダリー）を把握することにより、壊滅的変化を回避できるのではないかと、限界（臨界点）がどこにあるかを知ることが重要であるという考え方を示したものである。

一般財団法人環境イノベーション情報機構ホームページ  
(<https://www.eic.or.jp/>)より引用

※4 山形大学シラバス2021年版  
<https://www.ya-nagata-u.ac.jp/gakumu/syllabus/2021/home.html>



※5 カリキュラム  
カリキュラムとは、教育目標を達成するために、学生の学習段階・能力に応じ編成された教育内容の計画が配列されたもの。指導計画・指導方法・目標・内容などが体系的に示されている。カリキュラムには履修可能な科目、卒業に必要な条件が定められており、内容は入学年度によつて変動があることもある。教育課程と訳され、同意義で捉えられることが多いが、カリキュラムは教育課程よりも広い意味が込められている。  
(<https://www.shingakunavi.ne.jp/>)より引用

プラネタリー・バウンダリーは、2015年の国連総会で採択された持続可能な開発目標（SDGs）にも多大な影響を与え、地球環境に関する目標は、プラネタリー・バウンダリー内で達成すべきものとして設定されている。

記事監修  
食料生命環境学科長 平 智  
記事編集  
鶴窓会事務局長 松山 裕城  
(平成10年生物生産学科卒・平成12年農学研究科修了)